

---

# 逃亡者

馬河童

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

逃亡者

### 【コード】

N0158E

### 【作者名】

馬河童

### 【あらすじ】

追う男と追われる男。一体何の為に…

「はあ、はあ…」

俺は息を切らせながら走り続けていた。もうどのくらい走っただろう。

俺は数時間前からしつこい輩に追われていた。捕まったら金を取られて一巻の終わりだ。現在200mくらい間を空けているが、敵もさるもの、引き離されぬよう見失わぬよう後を付いてきていた。

電車にも負けない勢いで走る俺に対し、奴も恐ろしい形相で蒸気機関車のように追いかけてきた。駅前には差し掛かると人の数も増えてくる。俺はその流れに沿って、商店街や飲み屋街がある方へ駆け抜けた。

「待てっ」

後ろからそんな声が聞こえてくるが、逃げている時に「待て」と言われて待つ奴はいない。俺は全速力で人の群れの波に飛び込んだ。あまりの人数で歩道から溢れた人間の波は、本当の波の如く俺を後ろへ押し返そうとする。しかし、その効果は追っ手にも降り掛かり、奴も窮屈そうに前に進もうとしている様が見て取れた。俺はクロールの腕の振りでも掻き分け、何とか隙間を確保した。目の前には横断歩道があり、白線の後ろに停車中の車が列を成している。歩行者用信号機が点滅し、赤に変わろうとしていた。俺は再度追っ手のもがいている姿を確認すると、横断歩道を駆け抜けた。渡っている最中に信号は赤に変わり、車が走り抜けて行く勢いが背中に伝わる。道路を挟んで奴が悔しげな表情をしているのを見て、爽快な気分になる。そのまま別の人混みに紛れ込み、身を隠した。

俺はようやく一息吐いた。尿意を催していたので、眼前のビルに入り、階段を上がって3階のゲームセンターのトイレに向かった。店内は混んでおり、機械音と人間の騒ぎ立てる音で耳が痛くなる程だった。俺は騒ぎには目もくれず、トイレの扉を押す。中には誰も

いなくて、安心して小便器に体勢を構えた。

「ふう〜」

膀胱の荷も下りてすっきりした俺は、出口へ向かった。その時だった。

「見つけたぞ」

前方10m程の所に俺を追っていた男が立っていた。これではここを出る事など出来ない。俺は再度中へ駆け戻った。広いビルなので、ゲーム機を障害物にして、逃げ回る事は可能だ。何とか奥へおびき寄せ、隙を見て出口から抜け出るのが得策だろう。

作戦通り、奴は全速力で追って来る。俺は立っている人間にぶつかりながらも、慎重に奥へ逃げる。そして途中の大型ゲーム機を利用して方向転換。一気に出口目指して走った。

タッチの差で俺は出口を抜けた。しかも幸運なことに、奴は前につんのめって転倒した。俺はこの隙に階段を駆け下り、ビルの出口を目指した。幅広い階段を二段飛ばしで下る。

だが突然、眼前に何かが降ってきた。俺は慌ててそれをかわし、階段に尻餅をついた。

「何だよ…」

それは鉄製のゴミ箱だった。投げたのは奴だろう。隙間のある幅広の階段なので、上階から下の方が見て取れるのだ。そして物を落とす事も可能だ。呆然としている俺の耳に、階段を下りる音が聞こえてくる。俺は慌てて腰を上げ、再び階段を駆け下りた。

ビルを出た俺は駅を目指した。電車に乗ってしまえば、撒くことが出来ると思ったからだ。俺は駅前通りをひた走った。しばらく奴の気配は感じられず、走る内に駅が見えてきた。ラストスパートをかけようとしたその時、

「ハッハッハッ」

笑い声と共に一台の自転車が現れた。追っ手は自転車を盗んで先回りしたらしい。俺は自分の足に急ブレーキをかけ、反転して逃げた。だが相手は自転車、すぐに距離を詰めてくる。

「野郎、盗みまでして…」

俺は奴の執念に驚かされた。俺と奴との差はもうほとんどない。切羽詰った俺は、賭けに出た。車の流れを読み、横断歩道ではない車道を急いで横切った。

「うわっ！」

だが、死角からバイクが突っ込んできた。俺は何とかこれをかわそうと、身体をひねるが、バイクも同じ方向に避けようとして、我々は交錯した。

気付いた時、俺の周りに人だかりが出来ていた。そこにふらりと現れたのは追っ手の男。

「バカな奴だ。何にでもムキになる奴だったが…」

奴は呟くと、俺の身体に軽く触れた。

「それはお前だ。この野郎っ」

俺はすぐにやり返そうとしたが、奴に当たらない。

「鬼ごっこで死ぬなんてバカだよ…」

奴の目には涙が浮かんでいた。実は奴は俺の友人なのだ。そして俺達は街中で金を賭けた鬼ごっこをしていただけなのだ。それより死とは？

俺は自分の身体を改めてよく見た。なんと身体が透けているではないか。いや正確に言えば、俺の本当の身体は血塗れになって眼前にあった。俺はバイクに轢かれて死んでしまい、霊魂として浮いていたのだ。今の俺の存在に気付かぬ素振りや、奴は言う。

「でもこれでお前が永久に鬼だ。もう俺には触れないだろうからな…」

立ち去る奴の顔は心なしかにやけているように見えた。そんな奴に対し、俺は霊魂となった手で何度もタッチを繰り返すが、虚しく空を切るだけだった。

(後書き)

以前、新聞に投稿してボツになった、かなり昔に書いた作品です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0158e/>

---

逃亡者

2011年1月21日15時42分発行